

アジ歴データベースの実際

アジア歴史資料センター 牟田 昌平



図1：アジ歴開設当時のホームページ画像

1. アジ歴デジタルアーカイブの誕生

アジア歴史資料センターは2001年11月30日に開設されました。当時のホームページは、図1のように、非常にシンプルで地味なデザインです。なぜシンプルで地味なデザインになったかということ、1999年11月30日の閣議決定でアジ歴に課せられた役割が、「国立公文書館、外務省外交史料館、防衛庁防衛研究所図書館等の国の機関が保管するアジア歴史資料（近現代における我が国とアジア近隣諸国等との関係に関わる歴史資料として重要な我が国の公文書その他の記録）を電子情報の形で蓄積するデータベースを構築し、インターネット等を通じて情報提供を行うこととする」とされたことにあります。つまり、歴史資料の説明や解説さらには歴史解釈に関することは一切避け、とにかく大量に歴史資料を提供することを課せられたことにありました。

2. アジ歴デジタルアーカイブの進化

アジ歴の情報提供サービスは、インターネットを介して行われます。評価もアクセス数の増加によって左右されます。ただ、提供する資料の多くは一般に馴染みのない、多くの場合、手書きで古い文体で読みづらい歴史資料です。これまで特別な研究者しか利用してこなかった資料ですから、ネットで公開しても利用者は専門家に限られています。しかし、閣議決定では「国が保管する資料について国民一般及び関係諸国民

の利用を容易に」することがアジ歴設立の目的として明示されています。開設以来、いかに一般の利用者、さらに海外からの利用者を増やすかについて試行錯誤の連続でした。利用者の声を反映して、キーワードが思いつかなくても検索出来る「五十音検索」など新しいサービスも付与しました。さらに、歴史に関心のある人達をアジ歴ホームページへ引きつけるためインターネット特別展として「公文書に見る日露戦争」を2004年2月に実験的に公開しました。特別展の作成に当たっては、客観的に資料を提供することを念頭に、年表にそって資料を提供することにしました。この方法はその後の特別展でも踏襲されています。そして、2004年春には利用者の利便性を更に良くするための大幅なホームページの改良を行いました(図2)。



図2：2004年春の新ホームページ

開設から4年近く、アジ歴システム自体の改善は30件以上に及びました。改善にあたっては、利用者からいただいた意見を反映しました。これらの改善案は、2003年から検討に入った国立公文書館デジタルアーカイブにも反映されました。さらに公文書館システムにはアジ歴の初代システムでは実装を見送ったEAD2002(本書五島論文を参照)やZ39.50やSRW等の横断検索のための最新技術が採用されました。今回、新しくなったアジ歴システムは、5年間のアジ歴の蓄積と公文書館で採用した最新技術を融合した最先端のデジタルアーカイブです。

3. 新システム紹介

アジ歴では、国内だけでなく海外の方にも使っていただくように英語、中国語、韓



図3：新システムトップページ

国語のホームページを充実しました。ただし、提供する資料の多くが日本語です。翻訳コスト等の制約があり、現在、外国語での検索は英語のみとなっています。英語もタイトル、作成者、制作年月日等の基本項目のみを英訳しており、アジ歴日本語目録データの特長となっている本文の300文字程度のテキスト化はしていません。外国語への対応はさらに研究が必要と言えます。

① 階層検索機能

次に、新旧システムの違いを紹介します。一番の差は階層検索にあります。旧システムでは(図4)のように階層構造の全体をつかむことが出来ません。これはシステム上の制約からでした。しかし、今回、EAD2002を採用したことで、図5のように例えば国立公文書館であれば、左フレームに「内閣」、「御署名原本」、「明治期」と階層構造が一目で解るようになっています。

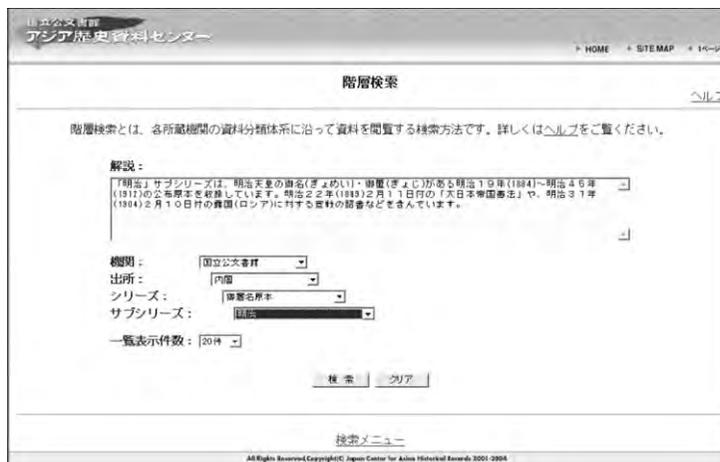


図4

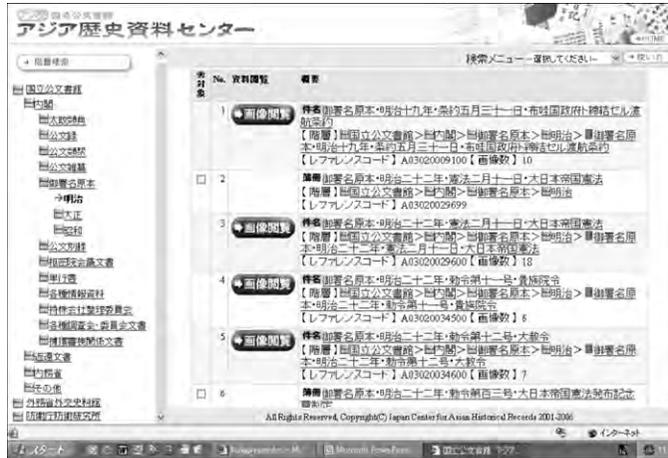


図 5

② 辞書機能

もう1つ、アジア歴史検索システムの特色としては「辞書」機能を持っています。例えば「太平洋戦争」という言葉をキーワードとして入力しても当時の文書には有りません。「大東亜戦争」と入力しない限り当時の関係文書は検索されません。このように、公文書が持つ歴史用語と利用者が検索に使う用語の乖離を埋めるために開発されたのがアジア歴の「辞書」です。旧システムから辞書は実装されていましたが十分に活用されたとは言えません。そこで、新システムでは、図6のように別ウィンドウで利用出来るように改善しています。



図 6

③ 資料群間の移動と資料群指定検索機能

さらに新システムでは、図7のように目録にある階層表示から指定された階層に移

動することが可能になっています。また、図8のように、詳細検索では、階層リストから任意の資料群を特定しての検索が可能になっています。

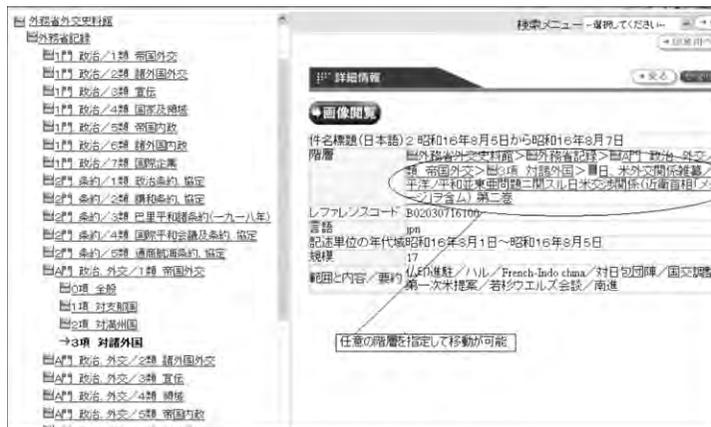


図7

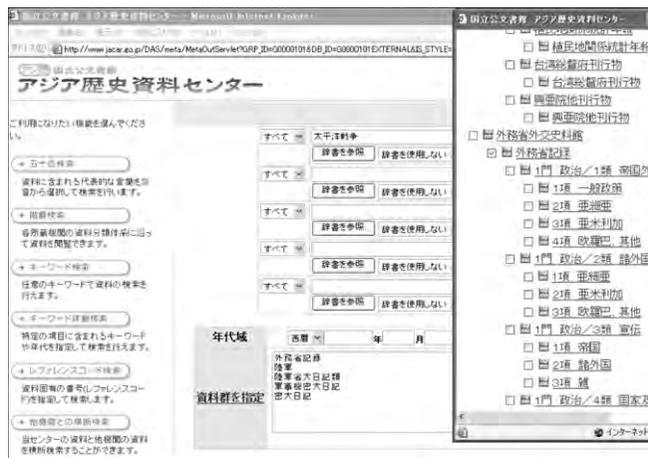


図8

④ 横断検索機能

新システムでも最も新しい機能は、旧システムでは実験レベルに止まっていた他機関との横断検索を実用化した点です。現在、国立公文書館データベース、国立情報学研究所の書誌データベース（Webcat）、岡山県立記録資料館のデータベースとZ39.50（横断検索プロトコル）を介して横断検索が可能になっています。例えば、「日米交渉」というキーワードで検索すると、アジア歴史データベースに含まれる日米交渉関係の公文書データと、日米交渉に関する国立情報学研究所の文献情報を横断的に検索することができるようになりました。横断検索によって、1次資料である公文書とそれを使った研究成果とも言える文献資料を横断的に検索することが出来ます。



図9：横断検索画面

4. 検索の実例

検索の詳細に関してはホームページの「資料の閲覧」の「使い方」をご覧ください。

<http://www.jacar.go.jp/search/usage.html>

ここでは主な検索について実例を挙げて紹介します。

① キーワード詳細検索と辞書展開

「キーワード詳細検索」の検索窓に「野村吉三郎」と入力し「辞書」を使用します。別ウィンドウの「辞書」には、野村大使の称号及び役職等を入れたキーワードが表示されます。結果は、1850件です。辞書リストから「海軍大将野村吉三郎」をカット・アンド・ペースで検索窓に入力して絞り込み検索をします。11件に絞り込まれます。(図10) さらに、「松岡洋右」と入力して絞り込むと1件になります。この1件は、国立公文書館所蔵の野村海軍大将の駐米大使任命にかかわる書類です。当時外務大臣であった松岡洋右が野村大将を駐米大使に推薦する近衛首相あての書状が文書に含まれています。目録データの先頭300文字に「松岡洋右」の名前があります。「キーワード詳細検索」は、左フレームで階層構造を確認しながら、「キーワード検索」、「辞書」展開、日時による絞り込み、対象機関の絞り込み、簿冊や件名の指定など、あらゆる機能がここに集約されています。

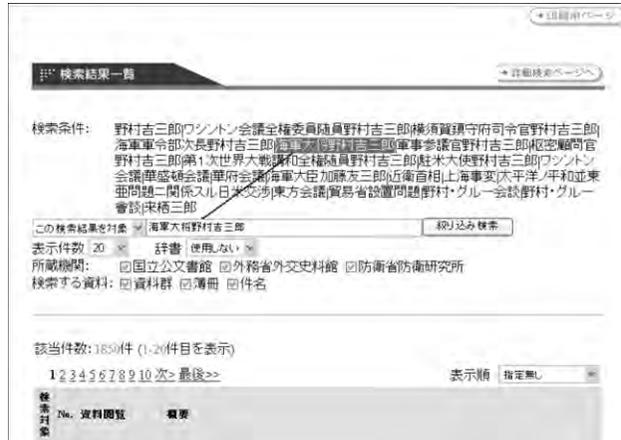


図10

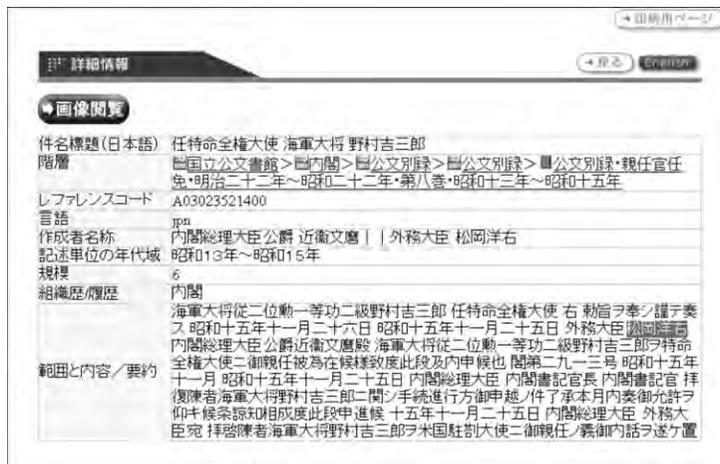


図11：目録内容

②階層検索

次に重要な検索手段として「階層検索」があります。組織の活動記憶といえる公文書は省、局、部、課のように階層構造の中で作成され整理されています。今回シンポジウムが対象とする外交資料の中の特に日米交渉関係がどのような階層にあるかを示したのが図12です。「外務省記録」の「A門第一類、帝国外交」の「対諸外国」にあります。外交史料館では「ファイル」と呼ばれていますけれども、右フレームに「簿冊一覧」があります。第一巻から第十九巻、21冊、日米交渉に関する原本並びに日米交渉に関するいろいろな記録集、それから、外務省が後日作成した報告書類があります。一部、失われた記録も有りますが、一般に思われている以上に記録は残っています。第一巻から第六巻までは、野村大使が着任して以降、真珠湾攻撃までの東京の本省とワシントンの大使館間で取り交わされた「日米交渉」に関する電文綴りです。

新しいシステムでは単に階層構造を表示するだけでなく、利用者の関心のある任意の階層に左フレームの階層や目録にある階層表示から自由に移動することが出来ます。階層の中を自由に動くことでいろいろな資料検索ができるようなシステムになっています。



図12

③インターネット特別展

アジ歴の5年の経験から検索サービスだけではアクセス数が増えないことは明らかでした。そこで、広く一般に利用者を広げるため、2004年から始めたのが既に紹介したインターネット特別展です。新システムでも広くアジ歴のデータベースを利用してもらうための重要な機能と特別展を位置づけています。現在、特別展の英訳作業も進めています。これによって海外の利用者に対しても日本の公文書について解りやすく触れてもらえるようになると期待しています。

5. おわりに

アジ歴新システムには多くの検索手段が組み込まれています。歴史資料をあらゆる角度から検証することが可能になっています。新システムでは、利用者からの問い合わせや間違い等の指摘に対する修正作業などが全てオンラインで出来るようになっていきます。アジ歴は利用者の協力無しには発展することが出来ません。是非、自由に使ってアジ歴への要望や意見をお寄せ下さい。アジ歴の情報提供システムは常に進化していきます。